OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	東日本大震災支援にみる異文化交流・慈善・共生 : イスラーム系NGO ヒューマニティ・ファーストと被災者たち
Author(s)	嶺崎, 寛子
Citation	宗教と社会貢献. 2013, 3(1), p. 27-51
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/24494
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

論文

東日本大震災支援にみる異文化交流・慈善・共生
―イスラーム系 NGO ヒューマニティ・ファーストと被災者たち―

嶺崎寛子*

Intercultural Experience, Charity, and Coexistence in Providing Emergency Aid in the Aftermath of the Tohoku Earthquake:
A Study Focusing on Islamic NGO Humanity First and the Survivors

MINESAKI Hiroko

論文要旨

本稿の目的は、在日ムスリムが東日本震災時に行った支援を、巻き込むこと、エンパワーメント等の開発学のタームを援用しつつ論じ、その意義を日本社会とイスラームという二つの文脈から整理・分析することである。事例としてイスラーム系の新宗教、アフマディーヤの在日メンバーらが、NGO・ヒューマニティ・ファースト（HF）として石巻市湊小学校避難所で行った支援を扱う。被災者たちが避難所という特殊な状況下でムスリムにどのような印象を持ったかを語りから検討し、避難所における「共生」がもたらした相互影響を具体的に見る。次に慈善の構造を恩／恩返しを援用し、受援者にとっての支援の意味という視座から整理し、一神教の慈善の構造よりは、被災者を巻き込んだエンパワーメント・アプローチが、効果的な支援を生んだ要因であると結論づけた。

キーワード　支援、慈善、異文化交流、イスラーム、アフマディーヤ

This paper aims to elucidate the value of emergency aid provided in the aftermath of the Tohoku Earthquake by Humanity First, an Islamic NGO whose members reside in Japan. The aid is evaluated on the basis of the following characteristics: involvement and empowerment. Humanity First was established in 1995 by Ahmadiyya, a new Islamic religious community originally founded in 1889, in British India. This paper is a case study of the Minato elementary school evacuation site at Ishinomaki and is based on cultural anthropological fieldwork conducted from May 2012 to the present. The paper explores Japanese quake survivors' narratives to determine their perceptions of Muslims in the special circumstances of the evacuation center, as well as presenting concrete examples of "co-existence" in the that context.

Keywords: Emergency Aid, Charity, Intercultural experience, Islam, Ahmadiyya

* JICA エジプト事務所在外専門調整員、日本学術振興会特別研究員等を経て、現在愛知教育大学教育学部講師。minesaki@auecc.aichi-edu.ac.jp

1. 本稿の目的

本稿の目的は、パキスタン人在日ムスリムらが東日本震災時に行った支援を、巻き込むこと（involvement）とエンパワーメント（受援者自身が力をつけること）等の開発学のタームを援用しつつ論じ、異文化交流や慈善という視座から、その意義を日本社会とイスラームという二つの文脈に即して整理・分析することである。事例として、イスラーム系新宗教アフマディーヤ（日本語正式名称は日本アハマディヤ・ムスリム協会。慣例に従い以下アフマディーヤと表記）の在日メンバーらが、教団を母体とする NGO ヒューマニティ・ファースト（以下 HF）として、石巻市立湊小学校（以下湊小）避難所で 11 年 3 月 19 日より 10 月 11 日まで行った支援を取り上げる。

HF を事例とした理由は以下の 5 点である。①イスラーム系 NGO が行った援助としては大塚マスジドと並び最大規模、②早期に被災地入りし、最初期から避難所閉鎖に至るまで継続的に行われた長期的支援、③支援の成功事例、④筆者の地縁血縁を通じ被災者側の取材ができ、支援する側／される側双方の視点からの複眼的・多角的な分析が可能、⑤アフマディーヤ教団のイスラーム新宗教としてのユニークな性格(1)。

本稿は 12 年 5 月から現在に至るまで愛知県および宮城県で継続的に実施した文化人類学的フィールド調査で得たデータに基づく。調査は湊小学校避難所現地対策本部長庄司慈明（1951-）、被災者の方々、湊小避難所ボランティア、HF メンバーらを対象として行った（敬称略、以下同）(2)。

2. 避難所での出会い——震災による草の根異文化交流の発生

2.1 石巻市立湊小学校避難所—災害ユートピア

被災東北 3 県（岩手、宮城、福島）の中で宮城県は最も多くの死者と行方不明者を出したが（死者 9535 人、行方不明者 1314 人［警察庁 2013］）、石巻市は宮城県の中でも最も甚大な人的被害を受け、3490 人の死者（うち震災関連死 234 人）と 453 人の行方不明者を出した［石巻市　2012］。15880 人の震災による死者のうち、5 人に 1 人は石巻市民である。

湊小は旧石巻市で国道 398 号線沿い、旧北上川にほど近い場所にある。湊区の自宅が全壊、自らも被災者でありながら湊小避難所現地対策本部長を務めた庄司慈明によれば、震災直後、避難した者達がそのまま湊小を避難所とした。当初の被災者数は 1100 人、15-16 日に最大の 1500 人まで増え、3 月末には 500 人、4 月中旬には 300 人に減った［庄司　未刊］。閉鎖は 2011 年 10 月 11 日。部屋割は庄司の発案により町区画ごとで、被災者からはこの「町ごと」が良かったという声が聞かれた。避難所の様子は映画『湊小学校避難所』に詳しい［藤川　2012］。湊小は在宅被災者に対する支援センターの役割も担い、明友館と並び石巻で最も積極的に在宅避難民への支援を行った避難所の一つであった［頓所　2012：106-107］。

湊小では被災者同士の助け合いが早い段階から生まれ、「災害ユートピア」［ソルニット　2010］的理想的共同体が生じたことも指摘したい［e.g.読売新聞 2011.3.20 記事「みんなで生きる」］。精神科医の安克昌は「災害の後、生き残った住民はある種の共同体感情の下で身をよせあう。これを災害心理学では「ハネムーン現象」「ハネムーン期」という」と言う［安　2011：252］(3)。避難所本部（初期は被災者のみ、後に一部ボランティアをも巻き込んだ組織）に関わった被災者は、最初の一月位は凄く楽しかったと語る。4 月 18 日に HF メンバーとして湊小入りし、以後断続的に 3 カ月間、湊小を中心に活動した日本人ボランティア N（20 代男性）は「4 月は、被災者達は公の場では少なくとも明るかった」と言う。庄司はソルニットの著作中のハネムーン期の相互扶助、思いやり等の例は「3.11 以後の数ケ月の間において、湊小学校避難所で私が経験したこと」と述べる［庄司　近刊］。当初ピースボート（以下 PB）として湊小入りし、後に個人として避難所本部に関わったボランティア T（20 代女性）の語りは、当時の雰囲気を伝える。

> ――湊小でずっとやろうと思ったのはどうしてですか？
> （庄司 以下（）内は筆者補足）慈明さんとか、A くん（本部食糧班、被災者、20 代男性）とか、他にも若い人が一杯働いていて、すごく、言い方変なんですけど楽しかったんです。本当に最初は面白かったんです。若い子達が一杯いて、次々色んな物資が沢山来て、それをうわ～っと片付けてうわ～っと人に渡して行ってっていう、何て言うか風通しの良さみたいなのがあって。（中略）信頼関係があればすごく風通

しもいいし、自分のアイディアでやれることはどんどんやれる。当初の、割と自然発生的にできた若い組織は、ああすごいなと思いました。

——災害ユートピアみたいな。

そうですね。本当にそういう感じでした。雰囲気として。全然顔知らないおっちゃんとかも、なんかいいよやってやるよって言って手伝ってくれたりとか。［2012 年 9 月］

庄司は「援助は断らない」との方針で湊小避難所を運営、多くの団体を受け入れた。4 月頃のボランティアは避難所内でのボランティア常時 30 人位と、湊小を拠点として、周辺地域に泥かきに行くボランティア 30-40 人規模とに大別できる。め組 JAPAN、「希望の湯」運営主体 JIM-NET、PB 等の日本の団体のみならず、国際 NGO や宗教系団体も多く入った。国際 NGO としては HF の他、主に泥かきを担ったドイツ銀行主体の NGO チームナディア、フランス人協会、インドネシアの団体等。独仏をはじめ海外メディアの取材や、要人訪問も多かった。パキスタン大使ムハンマド・ジャドマーニー（4 月）、ヴァレリー・エイモス人道問題担当国連事務次長兼緊急援助調整官（6 月）、農林水産大臣、国会議員団等（5 月）である。

海外メディア対応をした被災者（40 代女性）は、「避難所では、今まで会ったことのない人たちに沢山会った」と述べる。避難所は通常は出会えない人々が出会い、交流し、助け合う非日常空間だった。震災を契機に、被災者は災害ユートピア的雰囲気の中で異文化交流を持った。石巻に限らず、このような異文化交流は各被災地で、未曽有の規模で行われた。

2.2 HF の支援(4)

湊小で配食や食料調達を差配し、尽力したのは本部食糧班で被災者の A、B 父子（50 代と 20 代男性）らだった。状況やニーズは刻々と変化する。庄司は時期を、食料供給が全くない 3 月 14 日以前、非常に不安定だった 15 日-4 月上旬、自衛隊と HF が継続的に炊き出しを行った 19 日-6 月、弁当中心の配食となった 6 月以降と区切った［庄司　未刊］。HF が最初期からいたことが、HF への被災者の信頼や安心感に繋がったようだ。N は言う。

（被災者は見慣れないパキスタン人に）最初はビビったでしょうけど、（HF は）断トツ早くからいますからね。（中略）3 月中旬、下旬に

来た人達は HF に限らず、結構本物という感じがする。PB の初期メンバーとか凄いんですよ。初期のあの 3 月の大変な時期にいた、という現地の人とボランティアの団結も多分あると思う。［2013 年 2 月］

支援の中心を担ったのは、HF 代表兼アフマディーヤ日本本部代表兼主任宣教師、アニース・アハマド・ナディーム（1978-）と 2001 年来日のアヤーズ・ナジーブ・ウラ（1991-）の二名で、最も日本語の堪能なアヤーズがパキスタン人の中では最も長く湊小に滞在した。アフマディーヤ信徒らの多くが HF として炊き出しや物資調達等の後方支援に加わった。アヤーズに仙台で偶然出会い、誘われて HF に加わった男子大学生 K、その弟 R、前述の N、M（20 代女性）等後に主力となる日本人も 4-6 名程おり、宗派的・排他的な集団ではなく、日本人に対しては勝手連的な緩やかさがあった。

HF の初動は早く、3 月 12 日に支援物資を集めて本部・名古屋をメンバー 4 人が車で出発、13 日に仙台市岩切小学校避難所（500 人規模）に到着、翌 14 日から炊き出し開始を開始した。14 日には 700 食を提供、震災後初の炊き出しとして注目され、NHK とフジテレビで生放送された。津波被害がなかった岩切から、より支援の緊急性の高い場所に移るべく、HF は先遣隊を石巻に派遣。先遣隊は 16 日に湊小避難所を訪問、炊き出しを申し出て了承され、19 日に湊小入り、20 日から本格的に湊小での炊き出しを開始した。

以後は湊小を拠点とし、自衛隊と共同で一日一度炊き出しを行った。炊き出しには、自衛隊はご飯と汁物、HF はサラダとカレーとチャイとゆで卵という役割分担があった。「自衛隊と共同での炊き出しで安心できた」と言った被災者（40 代女性）がいた。4 月頃は毎早朝、パキスタン人メンバーB が数に限りはあったがチャイとゆで卵を配食し、早起きの年配被災者達に好評だった。B はカレー大鍋の守人で「身体にー、よく合うー」と言いつつカレーを盛り、初期のみの滞在にも拘らず被災者に人気があったようだ（次々頁写真）。湊小での炊き出しは 3 月には一日約 1500 食、4 月約 1200 食、5 月約 1000 食であった。4 月頃から調味料、野菜等を在宅被災者に配り、毎日、炊き出し時に体育館の一角で無料バザーを開催した。湊小被災者向けの炊き出しは 5 月 7 日まで、以後は自衛隊に引き継いだ。7 日には最後を記念してカレーパーティーを開催、石巻副市長らが挨拶に立った。8 日以降 26 日までは湊小で調理し、渡波駅前、石巻駅前などで 1500 食を提供、

28 日に主要メンバーは名古屋に撤退した。ここまでが支援の第一期、緊急支援の時期で、炊き出しとバザーによる物資の提供が主であった。

第二期はキッチンの設置とバザーの開催など、自立支援が中心となる。被災者（女性 40 代）はこの時期を「確かお別れ会したはずなのに、HF はなぜか、まだいた」と表現した。「大地を守る会」からの食材提供を受けてキッチンは 5 月下旬に出来、毎日避難所内外のおよそ 40 名程が利用した。パキスタン人のコアメンバー撤退後は、日本人メンバーK、N、M が被災者と協力しつつキッチンの実際の運営を担い、提供元との折衝や食材配達等の後方支援をアニースとアヤーズが担当した。N は「実際はチームシュクラン（後述）ら被災者が、キッチンを使って被災者に炊き出ししてたみたいなものです」と言う。HF 撤退後に、炊き出しの主体が被災者に移ったとみなすこともできよう。HF は 8 月 7 日開催の避難所の「みなと夏祭り」ではメンバー総出で 1800 食のカレーを提供した。その他株式会社ベリタスからのバザー用品提供を受け、大規模な無料バザーを計 6 回行った(5)。10 月 11 日の避難所閉所後もクリスマスプレゼント提供等を行い、12 年 3 月のメモリアルイベントには、HF は「母国の大使館をつうじて、エベレスト山の岩塩でつくられたローソク立てを 100 個も提供」［庄司　近刊］した。

2.3　草の根の異文化交流

多くの石巻市民やボランティアにとって、HF は初めて出会ったムスリムだった。アヤーズは、当時カナダにあるアフマディーヤ宣教者養成大学への進学準備として、日本主任宣教師アニースからイスラーム諸学を学んでいた。HF の支援活動を主に担ったのは「専従宗教者」のこの師弟である。

被災者（40 代女性）は HF との出会いを「彼らは気づいた時にはカレーライスを作っていた。食べ始めることができた頃にはカレー。あっちのカレー」と表現した。「あっちの」辛いカレー、チャイなど日々提供される食事は被災者にとって異文化だった。当初、彼らの提供するカレーが辛すぎて日本人の口に到底合わず、被災者たちは話し合ってなけなしのレトルトカレーを HF メンバーに食べさせ「日本人のイメージするカレーはこれ」と、辛さの調整をお願いしたという。HF はチキン、豆、マトンと食材に変化をつけ、バラエティに富んだ食事を提供したと言うが、味付けは同じ、常にカレーでは、口に合わない被災者もいたことは容易に想像できる。N は「被

災者の好みは癖になる人と「カレーはもう見だぐねえ」という人にはっきり二分された」と語った。甘いチャイも好みが分かれたようである。N はチャイの作り方をアヤーズから伝授され、第二期には彼がチャイを作った。

初期には被災者から支援品の 200kg の豚肉を渡され、調理を頼まれるという「事件」も発生。イスラームは豚食を禁じており、調理の是非が HF 内部で問題となった。日本語での HF 内部の議論の後、アニースが被災者約 5 名、本部食糧班約 3 名に対し「我々の神は豚肉を食するのを禁じているし、我々は豚肉は食べるどころか触ったこともない。しかし、人間が困っている時に同じ人間を助けることは何よりも大事と神は教えましたから、調理する責任を負います」と趣旨を伝えた。被災者側は「そういうことがあったか、気付かなかったー」と希望を撤回、「それなら私達はあなた達の教えを尊重して、豚肉を自衛隊に託してあなた方の作るカレーを食べることにします」と言い、豚肉は自衛隊が調理した。その後被災者側の配慮により、支援物資として HF に渡る肉は豚肉以外に限定された。

初めは被災者やボランティアも外国人が珍しく、どうしていいのかわからなかったのか、遠巻きにしてなかなか寄ってこなかった、とアニースは言う。挨拶を欠かさず、笑顔でいることを心掛け、イスラームの挨拶「アッサラームアライクム」をカタカナで看板に表記し意味も併記した所、すぐに皆もアッサラームと挨拶してくれるようになったという。

豚肉禁止等のイスラームの規定を、被災者らは生活を共にしつつ徐々に知っていった。N は、アヤーズに誤って豚肉入りの食事を食べさせ「糞を食べさせられたような感じ」で吐き出されたという「事件」を通じ、豚肉に対するムスリムの「気持ち悪い、汚い、穢らわしい」という感覚を肌で知った経験を持つ。一方パキスタン人メンバーは、夏のラマダンや避難所でのお風呂に苦労した。ムスリムは同性であっても裸を他人に見せることを嫌い、日本人のような「裸のつきあい」に強い抵抗がある。アニースは「人前だと服を脱がないので、湊小でお風呂に入る時は、誰もいない時に 5-10 分、パンツ履いて（お風呂に）入ってすぐ帰ってきた」と言う。

T：（前述の）N は、結構夏になってくると、礼拝のために早起きし

なきゃなんないんだけど、やだ～みたいなことを（アヤーズが）喋ってるとか、今ラマダンなんだけど、俺は今旅人だからいいんだとか、言ってました（笑）。

――あ～いいんですそれは。ラマダンは旅人はしなくてもいいので。

そうなんだ！私は、アヤーズ適当なこと言ってんな～と思ってた（笑）

――印象深かったことはありますか？

アヤーズのルーズさ？（笑）俺は今旅人だからとか（笑）［12 年 9 月］

礼拝は決して人前で行わなかった。N は「彼らは宗教のことは聞かれない限り、被災者の前では一言も語らなかった」とその徹底ぶりを語り、その効果を「宗教の要素を出していたら、えーって引いちゃう人が一杯いたでしょうね」とまとめた。書類にも一切教団名の記載はなく、石巻ではアフマディーヤという単語は全く使われなかった。調査の限り、被災者とボランティアのうち礼拝を見たのは庄司だけ、しかも一度きりであった。

――（庄司に）彼らの第一印象は？

支援に入って 4-5 日目（24 日頃）に、お祈りしてたのが第一印象。陰でお祈りしてたのを私が偶然見た。こういう人がやってくれてたんだっけか～と思って。私はその世界は知らないし、宗教も信条も違う。でも敬虔なユダヤ人、違う間違えた、イスラームの人なんだと思った。

――見えるところで礼拝してたんですか？

してない。食材の置いてある見えない所でしていた姿を私が偶々見た。

――それ以後は？

あれこの頃礼拝してる姿見せないなーと思って、4 月中旬ごろかな？礼拝してる？って聞いてみた。そしたら礼拝はしてる、してるって言ってた。それ以後は何故か人前ではやらないようになった。印象としては、柔軟で。礼拝は緊急時にはやらなくていいんです～とか、まとまってやればいいんです～とか、各自で礼拝していた。結構適当なんだな～と思って。なんか厳格な？イメージがあったけども。［13年1月］。

被災者と HF との異文化交流を体現するのが、「チームシュクラン」である。元湊小避難所の被災者の女性 4 人がアクセサリー販売の事業を興し、それを「チームシュクラン」と名付けた。シュクランはパキスタンの国語、

ウルドゥー語で「ありがとう」を意味する。そこからは、HF と被災者との温かい関係が窺える。以下は HP 上の名前の由来の説明である。

「シュクランとは、パキスタン語で『ありがとう』。避難所で炊き出しを続けて頂いた方に『HF』のアヤーズさんがおられました。アヤーズさんがいつも語ってくださった言葉は今も忘れない大切な思い出です。＜生きることは食べること、食べることは生きること＞ そして、教わったことば。 ＜ありがとう＞をパキスタンでは『シュクラン』といいます。これが『チームシュクラン』の名前の由来です。」(6)

――（シュクランに）イスラームだって知ってました？

（一斉に）知らなかった。宗教色を感じたことはなかった。違いは、全く感じなかった。

B : イスラームの人たちに会ったのが初めてで。イスラームの人たちというかパキスタンの人たちという印象です。

――いつ頃（ムスリムだと）知りました？

A : 食事をする機会に、宗教的なもの（話？）がちらほらとでてきて、あ～そうなんだって。豚が食べられないとか。

――イスラームについてのイメージはありました？

（首を振って）元々、イメージは全くない。震災がなければ会うことが無かった人たち。でも、すんなりと入ってきた。

――お祈りはしてました？

A：彼らはお祈りはしたことはない。

B：うん、お祈りはしてなかった。

C : 私は、私達には知識がないので、俗っぽい質問をしてしまったんですけど。イスラーム教の一夫多妻制について聞いたことがある。俗っぽいというのは、アヤーズはいずれはそういうことしたいの？一夫多妻がいいの？とか。そしたらアヤーズが、一夫多妻は欲望のためとかではなくて、貧しい女性を、昔女性の数が（男性より）戦争で多かった時に、貧富の差があって、貧しい女性の生活を守るための愛情なんだよ、皆が困らないように、って説明してくれて、それは勉強になった。アヤーズと話して、ちょっとずつ勉強した感じ。［2012 年 8 月］

N：（イスラームを）怖いとは思わなくなりましたし、イスラーム教の中の一番過激で危ない部分だけを聞いてたんだなと気付かされましたね。今までは怖いというイメージも持ってました。イスラーム教徒の中からテロリストが出てるというのはどうしても。同じグループとして見ちゃうのはありましたけど。全然違うんだなという。［13年2月］

T：HF が湊小学校でボランティア活動をしたことによって、イスラームに目覚めた人は多分いないんじゃないかと思います（笑）。イスラームに対する理解は、うん。パキスタン人って悪い人じゃないんだ、イスラーム教徒って別に怖い人たちじゃないんだ、ていう風に思ったと思います。［12 年 9 月］

被災者とボランティアの語りから、HF が宗教色を極力排除し、感じさせなかったことがわかる。被災者にとってイスラームやパキスタンが全く馴染みのない宗教および地域であったことも、ユダヤ教とイスラームの取り違えや「パキスタン語」との表記から窺える。礼拝に関する語りからは、教条的で厳格という被災者のイスラーム・イメージが、実際に彼らに出会うことで「柔軟」との印象に修正されたこともわかる。

彼らのボランティアの一義的動機は、困っている人を助けたいとの善意ないし宗教的使命であったが、アニースは「（日本の人々に、ムスリムである）我々は怖くない、共生できる隣人なんだ、と思って貰いたい」とのいわば「副次的」な動機についても語っている。被災者らの語りから、この副次的な目的は達成されたと言える。後述するが、布教を目指さない、彼らの現実的な目標設定がおそらく奏功した。

またアヤーズの日本語力は被災者との交流に非常に役立った。HF と親しくなった理由をシュクランの 4 人は「言葉の壁がなかった」ことと言う。

C：言葉の壁がなかった！アヤーズは方言も真似をするんですよ。
D：方言も話せるようになった。
A:すごく言葉ができて。冗談も言い合えるし、だから方言も言えるし、なんでも話せたから、外国人って感じがしなかった。すごく言葉ができたんですよ。［2012 年 8 月］

シュクランの 4 人は HF メンバーを 1 人 1 人名前で呼び、個々のエピソードを語った。前述の食糧班、被災者の A は「本部は家族だから」と言った。庄司は避難所運営に尽力した被災者達と、HF 含め「固有名詞の距離」のボランティアを「家族のよう」と表現し、アヤーズも「家族」という言葉を使った。濃い人間関係が窺える。HF メンバーは在日年数は長いものの、結束の固いコミュニティ内部に留まる傾向が強く、日本人とは今まで積極的に交流を持たずにきた。震災を契機に、災害ユートピアの最中に彼らは日本人とかつてない深い交流を持った。人間同士として深い関係を持ったことは被災者、HF 双方にとって印象深い、忘れ難い経験となったようである。

3. アフマディーヤ教団とＨＦ（定訳「人間性が一番」）

アフマディーヤは、パンジャーブ州カーディヤーン生まれのミルザ・グラーム・アフマド（1839-1908）を開祖として 1889 年に英領インドで起こったイスラーム系の新宗教で、一般にイスラーム改革復興運動の一つに位置づけられる(7)。パキスタンのインドからの分離独立に伴い、1947 年にパキスタンに集団移住した［Smith 1960］。開祖の死後はカリフ制を採用、現在カリフを推戴する唯一の教団である［Smith 1960］。ムスリム国家を標榜するパキスタンの政治的文脈において、アフマディーヤの特殊な教義が問題化され、パキスタン国内では迫害された。迫害が厳しさを増した 84 年、教団は本部を英に移転。信徒総数は教団によれば数千万、殆どがパキスタン国外に居住する［詳細は嶺崎 2013］。2012 年 10 月現在の在日信徒は 15 歳以上女性 68 人、同男性 72 人、子供含め総数約 200 人程度である。

HF はアフマディーヤ 4 代カリフが 1995 年に設立した国際 NGO で本部を英国に置く。宗教団体が設立した NGO ながら自らを「非政治的・非宗派的な機関」と位置づけ、支援の中での布教を禁じ、ボランティアと宗教とを意識的に切り離す点に特徴がある。宗教活動と支援との分離は、パキスタン国内での援助を円滑にするため、政治的理由から不可欠であったと考えられる。石巻における支援でも彼らが宗教色を極力排除した背景には、教団のこの方針がある。アニースはこの分離に関し以下のように語っている。

1994 年（原文ママ）に当時のカリフのアドバイスで、ボランティア

はボランティア、宗教は宗教、で全く別にすることになった。宗教と別にボランティア団体を作りなさいという指示が出ました。よくキリスト教のボランティア団体などで、宗教を隠してボランティアをし、その後布教するというのがありますが、私達はそういうことはしません。ボランティアはボランティアで必要とされている。私達は皆が困っていて、必要な時はボランティアとして行く。HF のメンバーはみんなアフマディーヤだけど、アフマディーヤとは関係なく、HF はそれ以外の人もウェルカム。我々は HF が出来る前にもボランティアはしていた。宗教を隠して、人のためにやる。ボランティアだから。そういう時には布教はしない。もちろん色んな場所で、私は宣教師だから布教はするけれども、そういう時はしない。我々は伝統として、カリフのアドバイスは守る。イスラームの教えを人々に教え、広めるのはイスラームではとても素晴らしいことで、尊敬される行為です。しかし、苦しんでいる人々に食事や心のケアではなく、宗教を勧めるのはイスラームの教えに反し、アフマディーヤはこれを固く守っています。イスラームの教えでは、アッラーを喜ばすために困っている人々を助けるのは、必要不可欠であり、義務です。

宗教と支援の分離は石巻における支援でも奏功した。在日パキスタン大使の湊小避難所訪問が実現したのは一重にこの分離戦略の賜である。在日本パキスタン大使は「HF による支援」は視察可能でも「アフマディーヤによる支援」視察は政策上不可能であった。大使館側には、震災支援においてパキスタンのプレゼンスを主張したいとの思惑があり、利害が一致した。

アニース：大使館には、本国で何か（アフマディーヤ関連）事件がある度に抗議の手紙を出していたが返事が来たことはない。今回のボランティアの話で初めて大使館から連絡があった。私はもうウェルカムな感じで。

現在両者の関係は良好である。大使館と被抑圧側のアフマディーヤが一時的にせよ、友好関係を保てること自体稀有であり、それはアフマディーヤにとっての分離戦略の有益性を証拠立てている。

ところで宗教色を極力排除した教団を基盤とする NGO という点、HF と

アフマディーヤの関係は、アガー・ハーン開発ネットワークとパキスタン内の少数宗派、イスマーイール派のそれと類似する。イスマーイール派は社会開発への本格的進出を 1970 年後半に行い、イマームが「ヒューマニスト」イメージを打ち出した［子島　2002：9、15］。アガー・ハーン開発ネットワークはその後世界銀行のパートナー等として確固たる地位を築いた［子島　2002：212；西水　2009：226-231］。アフマディーヤの宗教と援助の分離戦略の背景には、イスマーイール派の成功があった可能性もある。

HF は援助理念として①公正性：宗教・人種や 政治観など関係なく、必要としている人々に援助を提供、②効率性：資金（募金）の 93 %を援助資金として利用、③共同性：他 NGO や地元当局との連携、④グローバルリソースの活用：グローバル的な専門知識とリソースを組み合わせ、現地のニーズに対応、⑤エンパワーメント：地域社会の一刻も早い自立を目指し、現地の人々を指導し、独立できるよう力をつけること、の 5 点を掲げる(8)。

資金の 93%が間接経費ではなく直接経費として使われる効率のいい運営システムは、人件費がかからないことに由来する。教団や HF のための信徒の活動は基本的にアンペイドワークである。その場合本業との両立が常に問題となるが、石巻での支援を主に担った二名は神学生と主任宣教師という専従宗教者で、この問題が生じなかった。ボランティアのアンペイドワークによって人件費が低く抑えられるのは、宗教系 NGO の特長ではないか。主任宣教師は、他 NGO や関係団体との交渉と折衝が不可欠の災害支援の現場は、同じく交渉や折衝を日常業務に含む宣教師には理解しやすかったと、仕事内容の類似性を指摘した。

イスラームにおける慈善、特に喜捨はサダカないしザカートとして知られ、一般にこの文脈で理解される。一般にサダカは六信五行の五行の一つである義務としての喜捨を指し、サダカは自発的な喜捨を指す。またサダカは労働で支払うこともでき、非ムスリムへの慈善も認められてはいるが一般的ではない。クルアーンではサダカとザカートの意味の区別は明確でなく、イスラーム法の成立過程でこの区別が明確化された。

一方アフマディーヤの文脈では、この二語の区別は以下の理由により重要ではない。アフマディーヤでは信徒は収入の 10-16 分の 1 を毎月、義務としてチャンダ（寄付）する。その他随時、用途を限定した臨時チャンダを募る。また異教徒からのチャンダも受付ける。このチャンダが教団および

世界各国での HF の支援活動の資金源となる。チャンダは信徒の義務である点でザカートに近いが、金額と用途が限定されていない点がザカートと異なる。またシャリーアでは多神教徒に対するサダカは許されているがザカートは許されておらず、この点、石巻における HF の支援はサダカに近い。イスラームにおける慈善は歴史的にも、対象をムスリムに限定するのが基本で、非ムスリムを積極的に支援するイスラーム系 NGO は多くない。ここに HF の特徴がある。以上のように HF の支援は、サダカとザカートというスンナ派の枠組みでは捉え切れない。よって HF の支援はサダカとザカートではなく、アフマディーヤのチャンダの文脈で理解されるべきであろう。

アフマディーヤは、ムスリムの義務を一日五回の礼拝や断食などのアッラーに対する義務と、人間に対する義務に二分する。人間に対する義務は身内、隣人、同僚から旅人までを思いやりをもって助けることとされる。その際宗教や人種社会的地位等は問わないが、これもムスリムと非ムスリムとを明確に区別するイスラームの文脈では珍しい。例えば属人法であるシャリーアでは、権利義務関係や身分法等においても、ムスリムと非ムスリムの扱いははっきり異なる。非ムスリムに対しムスリムにするのと同様に宗派の別なく援助を行うのは、HF の支援の特徴の一つである。「迫害を受けている、過激な」宗教集団ではなく、支援を通じて「共存できる、安心できる」集団であるとアピールすることは、亡命者として非ムスリム社会に生きるアフマディーヤの、多角的な生存戦略の一環であるといえる。

4. 被災者・HF にとっての震災支援

4.1　クリーンな援助、笑い、エンパワーメント

被災地とその雰囲気、ニーズは時間的経過につれ変化する。被災地は「ハネムーン期」を終え「幻滅期」に入っていくと安はいみじくも指摘した［安 2011 : 258］。被災経験が多様であるように、「復興」経験もまた多様である。時間と共に、仮設住宅の当選可否や立地条件、就職・経済状況、被災程度、災害危険区域指定の有無(9)等の差異が顕在化した。それに伴い、大小様々な亀裂や蟠りが生じるのはむしろ当然である。震災は時間の経過につれ「格差の問題」になる。本稿がハネムーン期とその後の幻滅期を扱うことに注

意されたい。最初期は街に遺体が転がり、匂いがひどく、街が変わり果て、人々は過覚醒で凍え飢えていた非常時である［石巻かほく　2012；三陸河北　2011；創風　2011；みやぎ民話の学校　2012］。被災者（30 代女性）は、車中で亡くなった人の手がありえない角度に曲がって突き出した車の隣を「あ～もう（この人）だめだっちゃ…」と思いつつ、警察に連絡するでも、騒ぎ立てるでもなく、無感動に通り過ぎた震災直後の経験を語った。

災害支援では、ニーズが時間の経過により著しく変化する。当初のニーズは泥かきと炊き出しであった。炊き出しも最初期の「ともかく食べ物を」という段階から被災者が「自分たちで調理を」と望む段階まで、時間の経過につれ要望が変化した。そして常にニーズがあった物資の分配で、最もボランティアの「良し悪し」が顕在化した。湊小避難所では物資の配分等々をめぐりトラブルを起こしたボランティア団体があった。被災者達は HF とその団体を語りの中でしばしば対比させつつ、HF の支援を「クリーン」「貰いやすかった」「あさましくない」等と表現した。どのような支援が、被災者にとって「クリーン」なのか。以下ではそれを複数の語りから見ていく。

> 庄司：HF は、沢山物を持ってきて、在宅の人を含めて渡した。決して（被災者同士の）競争心を煽るやり方ではなかった。（ある団体）は無秩序の援助。無秩序の援助だと、結局そういうのでは、腕っ節の強い人が勝つんだね。100 あったら 10 回に分けてだんだん渡すとかしないといけないんであって。一回 10 人の人に渡して、そして次にその人たちが退場したら次の人に、といった感じでやれば、やった後に不公平感が育たない。避難所は共同生活で、助け合いだから、気配り、目配りをしないと絶対だめなわけさ。「どうやったら自立できるかを考えないと」と言ってもしない。わざわざ競争心をあおるやり方を続けてた。あれは結局避難者を目下に置いてるんですよ。感謝してよって言って。同じボランティアっていっても、（HF とは）全く質が違う。
>
> 避難者の目標は、最後には自立なんですよ。避難者の自立。ボランティアの方はいなくなるわけだから。だから自立のためにも、協調性を作る、（物を）分け合う、という土壌は大切。競争心を煽って協調性を作る土壌を壊す形の援助は困る。［13 年 1 月］

T：HF は順番をきっちり分けて、同じ内容のセットを皆にあげていくんです。彼らがやってたのは調味料とか洗剤とかの生活用品だったと思うんですけど、それを結構、お金をかけてきっちり作るんですね、ギフトセットとして。それを 1 人一個ずつ。

（ある団体は）例えば中央に物があったりして、貰いたい人がぐるっと囲んでたりすると、「待って下さい順番になって下さい」っていう事を言っても聞かないわけですよ。で、どんどんどんどん取られちゃって、あの人はずるいみたいなことになったりとか、あとは、物資を沢山配りますというと朝早くからずら～っと並ぶんです。で、朝早くから並べる人はいいけど、遅く行かなきゃいけない人、家のことをしなきゃいけないとか、避難所の掃除当番とか、で、遅く行かなきゃいけない人と不公平だっていうのが沢山出るんですよ。最初は戦場みたいなんですよね 4-5 月位のバザーって。とりあえず段ボール沢山どんどん開いて、そこに人がうわ～っと行って、いろんなところから叫び声とか、子供がぎゃ～っと泣く声とかするんです。で、スタッフがちょっとそれ止めて下さいとかいうと、何この野郎とか言って、男の人に恫喝されたりとか、スタッフがめげて帰ったり。［2012 年 9 月］

「チームシュクラン」の 4 人（HF のバザーについて）

A：ともかくやり方がスマート。きれいにいただける物資だった。

B：「人間性が一番」って彼らのキッチンのところに横断幕が貼ってあって、それを見る度にはっとするような状況、人間性を失ってしまう状況だったので。彼らのやり方はスマートだったし、涙出る、人間性が。彼らの人間性も、あの横断幕のことを考えても、涙出る。

（ある団体からの物資）あれは、すごい上から目線で嫌だった。

「目下に置く」「上から目線」という言葉に注目したい。HF が避難所で被災者と上下関係を作らず、人間として対等な形で寄り添っていたことは非常に重要である。特に最も日本語が堪能で、人を笑わせるのが上手なアヤーズは人気があったようだ。シュクランの 4 人は語る。

A：彼らは子供たちとの交流を積極的に図ってくれていた。

B:（HF は）すんなりと入ってきた。

D：アヤーズさんは日本語上手だよね～。

C：上手上手。空気も読める。冗談も上手。冗談が上手でね～。

B：庄司さんとの掛け合いがおかしくて。

D：漫才デビューできるよ！（一同笑）

A：避難所生活で辛かったのは、朝から晩まで何一つ隠すことができない。プライベートがない。包み隠さず、夫婦喧嘩の音もなにもかも全部みんなに筒抜け。これはしんどい…。この状況を、誰か笑いに変えてくれる方がいる。笑えるというのは良かった。

厳しい状態下での「笑い」はゆとりを生む［例えば頓所　2012：35-36］。アヤーズと庄司、ボランティアと被災者が提供した「笑い」は、有形の支援に勝るとも劣らない価値を持つ、無形の支援だったのかもしれない。

そして被災者に断然人気だったのはキッチンだった。シュクランの方々がこの話をする際、にわかに饒舌になったことは忘れがたい。

A：何よりよかったのは、キッチンを作ってくれたこと！これはすごくよかった。全部そろっていた。食材も。

B：キッチンができてからはお料理をしに行ったかな。

C：外部の方も使えた。

A：何時に空いているかとかアヤーズに聞きにいく。彼が管理していて、毎日使える野菜がキッチンの黒板に書き出してあって。避難所のクラス単位で作ったりしてたところもあった。あれはすごく助かった。

B：（食事は）お弁当がでてきて、お弁当を食べて、それが辛くって。もう何日もお弁当。出てきた物をただただ食べる生活をしていて。

C：（いつかは）避難所を出て、料理をしないといけない。女だから台所に立たないとダメ。でも（毎日お弁当で）段取りも忘れそう…部屋の中でもそういう話題がたくさん出て、じゃあキッチンに行きましょう、という話になった。

D：中の人（湊小避難者）も外の人（自宅避難民）も一緒に使えるように、キッチンという居場所を作ってくれた。

C：お部屋の中で居場所が無かった人々がキッチンに足を運んだんです。

――（HF の活動全般の）印象はどんな感じでした？

A：彼らは宗教を信仰しているせいなのか、慈悲深い。被災者の立場

になって何でも受け入れてくれる。新鮮な野菜とか、彼らは、今一番欲しいものをくれた。［2012 年 8 月］

受け身にならざるを得ないことの辛さが伝わる。自宅では毎日料理できたのに、避難所では与えられるものを頂くだけ。やむを得ないとはいえ、受け身で与えられる側に立たされ、非常時ゆえ辛いとも言えず、自立心や自尊心が徐々に削がれていくような日々。そんな中、食材と器具が揃ったキッチンは彼女達に「自由に、自分たちで作る食事」という成果をくれ、自分で裁量することの喜びを思い出させてくれたのではないか。これは援助を通じて受援者がエンパワーメントされた事例である。

また「彼らは、今一番欲しいものをくれた」という言葉からは、彼らの支援が被災者のニーズに沿っていたことがわかる。これは非常に重要である。「支援する側の都合」と「受援者側の都合」がマッチし、精神的にもケアされて初めて、その援助には価値がある。開発学の成果は、マッチングのためには受援者を巻き込むこと、エンパワーメントすることが最重要であると明らかにしたが、本事例もそれを裏付けている。最初期の炊き出しの頃から、野菜を切るなど被災者達は HF と共に働いた。

HF の場合、①湊小避難所に場所を絞り、②継続的に、③被災者のニーズに合わせた支援を、④被災者を巻き込んで行っていたところに特徴がある。③は特に重要である。石巻のボランティアの組織化と情報共有、割り振りの詳細を、「石巻モデル」と名付け紹介した中原の著書からは、ボランティアと要支援者の間のマッチングが重要かつ有効であったことが窺える［中原　2012］。HF は避難所で被災者と寝食を共にし、共に笑うことによって、被災者と親密な関係を築くことに成功した。「共にいる」ことで築いた信頼関係と、被災者のニーズを尊重する姿勢があったからこそ、彼らの支援は被災者に評価され、一定の成功を収めたと言えよう。

4.2 HF にとっての支援

支援の動機と、被災者の印象についての HF の二人の語りを引用する。

アニース：宗教の意味は神様のお祈りだけではなくて、人間が困っているのに放っておいてお祈りしても、お祈りの意味がない。神様へのお祈りは第二。人間の人種は関係ない。人間は人間ですから。人間

が困っている時、まず人間が第一。ヒューマニティ・ファースト。（中略）被災者の方は、ともかくすごく我慢していらっしゃった人達でした。ちゃんと列に並んだり。得た物は沢山あった。

――（アヤーズに）印象深かったことは？

アヤーズ：日本人の団結力が見れたのはすごく印象的。1000 人位いる（湊小）避難所で 300 個のお握りが配られた。皆が食べられないなら誰も食べない方がいい。そういう団結力、一人一人のことを皆が考えるというのは、今の世界だったら日本人にしかできないことじゃないかなと思います。我慢強い、あの時に見られたのは中々印象的。

自分たちの顔や体型もみんなと違うじゃないですか。それでも自分たちと彼ら（被災者）の繋がりは、人種や国籍の壁を越えてできている繋がりなんですよ。そこが被災地に出向いてやった時にしか生まれない繋がりなんです。なぜかというと、純粋な人間の姿が見られるんです。（中略）ライフスタイルは人間の考え方を変える力を持っている。何もかも失ったときに人間の本能が見える。彼らは自分たちの持っているものをすべて失った後に、助けにきた者たちと繋がったんですよ。

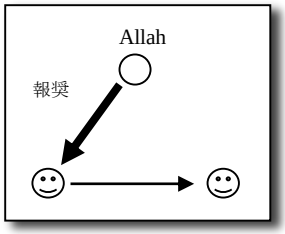
僕たちが行ったのも彼らから何かを得るためではないし、彼らも僕たちから何かを得るために繋がったのではないんですね。人間が困っているから。困っている人間が助けにきた人間と繋がる。そこにはパキスタン人とか人種とかいう関係は消えるんです。自分の感覚はそれだった。そこから生まれていったのが友達や家族みたいな関係。お父さんと息子って何かを得る為の関係ではないんですね。愛情、助け合い、人間の本能の関係。被災地で初めて得る関係だと思った。

――被災地経験と信仰との関係を教えてください。被災地での支援経験は信仰に影響を与えましたか？

「困っている人を助けよ」というのはイスラームの中の一つの教え。神様の創造物なんですね、人間というのは。人間も他の動物も神が創った。みんな神様の子供。そこにはムスリムだけが神の子供ということは書いてない。困っている人もみんな神さまの子供。（だから神さまは支援によって）子供を可愛がって貰ったお母さんと同じ感じになる。自分の信仰にすごくいい影響を与えてくれましたね。自分は皆さんを助ければ、神様が喜ぶんじゃないかという感覚で行った。

向こうで皆さんと繋がっていろんな関係を維持していく中で、神様が望んでいるのはこういう関係だと理解させて貰った。そういう面ではすごく影響を与えて貰いました。自分の信仰が以前よりも強くなった気がする。待ってた人達はムスリムでもない。自分の信仰を否定もできないし認めてもいない人。イスラームの名前くらいしか知らない人が多かったと思う。彼らと触れあえて、ムスリムってそういう活動をする人なんだという印象をもった人は何人もいるはずなんですね。そういう思いを持つ人たちは自分にとって貴重な人たち。信仰的にはすごく強くなった。イスラームと以前よりも繋がれました。[12年8月]

彼らは何よりもまず、困っている人を助けたいという純粋な気持ちから被災地に赴いた。それは被災者やボランティアとの相互交流を生み、結果としてお互いに対する深い敬意と信頼を育てた。そして支援は信仰にも良い影響を及ぼしたと、アヤーズのみならず多くの HF メンバーが語っている。



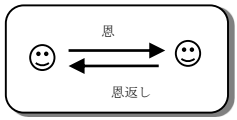
5. 支援を受けるということ

5.1 慈善の構造――セム系一神教と日本

セム系一神教――ユダヤ教、キリスト教、イスラーム――には慈善の伝統があり、それは来世で天国に行きたいという動機に基づく善行という共通性を持つ［Lev　2009：258-259］(10)。当事者がこのような慈善を、施す者と施される者という二者関係ではなく、神が介在する三者関係として認識していることには十分な注意が必要である。そこでは神が重要な役割を担う。施す者は施される者からの感謝や尊敬といった直接的報奨を重要視しない。報奨は神から齎されるからである。施す者にとって一義的に重要なのは神と施す者との二者関係であるため、慈善はしばしば神からの報奨を受ける手段とさえ見なされる(11)。施される者も自分の道具性を自覚していた［Lev　2009：260］。施される者には施した者へ神の恩寵を祈祷（ドゥアー）することが期待される。セム系一神教における慈善は、利己と利他といった人間同士の単純な二者関係だけでは捉えきれない(12)。神が介在する三者関係という構造を踏まえて論じる必要がある。

そして施される者が神による報奨を得るための「媒体」に過ぎないという、セム系一神教における慈善の構造が、施される者の屈辱感や罪悪感を軽減する機能をも備えている点はぜひ指摘しておきたい。イスラームは殊にそれに自覚的である。クルアーンは言う「親切な言葉と寛容とは、侮辱を伴う施し物に優る。アッラーは富有にして慈悲深くあられる(13)」[2:263]。

一方、神を介した三者関係に基づく慈善が文化的に根付いていない日本では、他者に無条件で施しを与えることには必ずしも肯定的な評価が伴わない。人々はボランティアや慈善をしばしば偽善とみなし、正義漢ぶった「利己的行為」と認識する。



子島はベネディクト・ルースを引きつつ日本における「慈善」の基軸となるのは、恩と恩返し／報恩であるとし、被災地で「恩返し」と言う語りが多く聞かれたことを指摘する［子島　2013］。筆者の聞き取りの実感も同様で、被災者の語りに「恩返し」「お返し」は頻出した。少なくとも東北の被災地では現在でも、恩は受ければ必ず返すべきであると認識されている。それは恩と報恩が対をなす、人間同士の二者関係における互酬関係である(14)。恩には返済の義務があるからこそ、人は謂われなく恩を受けることを嫌う。だからこそ日本人は互酬関係が含意されない（かつ神などの罪悪感を軽減する第三者が不在で二者関係が前提とされる）、「施し」や「施しを受ける」ことに居心地の悪さを感じるのではないか。施しは「あなたには恩を返す力がない」と宣言されることであり、恩／恩返し関係から排除される「弱者」性の顕在化を、おそらく意味するのである。

5.2 エンパワーメントと巻き込むこと――支援の有効性をめぐって

依存と無力感は双子の兄弟であり、施しを受けることは諸刃の剣である。それは人に無力感を抱かせ、しばしば屈辱を伴う。援助は、受援者の自尊心や自立心を損なう危険と隣り合わせでもある。だからこそ、近年の開発学では現地のきめ細やかなニーズの把握、エンパワーメント、現地の人々を巻き込むことが重視され、グラミン銀行やNGO・BRACなどのマイクロクレジットやエンパワーメント・アプローチが評価されたのである［モーザ 1995；フリードマン 1995；ラヴェル　2001；佐藤　2005］。開発支援と被災者支援は非常に似ている。開発援助が日常生活の中で行われ、災害と

被災は非日常の出来事という違いは確かにある。非日常／日常という軸からみれば、日常に援助が入り込んでいる開発支援の現場と被災地では、一見事情が異なるように見える。しかし災害は一過性ではない。最初の非日常はいつしか「異常な日常」になる。人は「震災後」という非日常にすら適応すると、トラウマ研究は証明している［e.g.ハーマン　1999 : 111-180］。従って災害支援の現場でも開発学の理論は有効であると筆者は考える。

結論を先取りすれば、HF の支援における最大の成功要因は、受援者の自立／自律心を損なわず、ニーズを重視し、彼らを巻き込めたことに尽きる。セム系一神教の慈善の構造が有利に働いた一面もあるが、支援が効果的だった一義的な理由はおそらくそれではない。HF の支援が徹底して「まず被災者ありき」だったことこそが、支援が成功した最大の理由であった。

一方、被災者のためという動機を持たないボランティアも少数ながらおり、彼／彼女らに悩まされた被災者やボランティアがいた。例えば「ワンマン社長のよう」な強権的リーダーシップを発揮した、毀誉褒貶相半ばするボランティアが湊小避難所にはいた。被災者からは、このボランティアに対する苦情が本部に相当数寄せられた。非常時に行使できる火事場泥棒的権力の誇示、それによって得られる快楽、威信、支援によって得られる名声――慈善によって得られる不可視な資源――の獲得を主な動機として、被災地にいた者も事実いたのである。庄司は「利己的」なボランティアについて、「まさかそんなボランティアがいるとは思わず、性善説に基づいてボランティアを疑わず、何が起こっているのか、問題とトラブルにしばらく気付けないでいたことと、他の善意のボランティアに「来なければ良かった」という落胆を抱かせた」ことを、避難所現地対策本部長としての反省点としていた。また彼は、将来受援側に立つ自治体にこのような「危険」なボランティアの存在を伝え、事前に対策を講じる必要性を周知するべきと指摘した。災害は、犯罪や詐欺、不可視の資源を目的とするボランティア等に対する脆弱性を顕在化させる。不可視の資源を目的とする被災者不在の支援は、被災者から「(我々を) 下に見ている」と嫌がられた。

それは殊に支援の現場においては、実践的には被災者のニーズや視点の重視と、被災者を「巻き込む」ことが重要であること、理論的には不可視の資源を分析対象に組み入れることが必須であることの、双方を証拠立てている。

6. おわりに

HF の一連の震災支援は、被災者らの語りを総合すると支援の成功事例といえる。最大の成功要因は被災者の自立／自律心を損なわず、そのニーズを重視し、彼らを巻き込めたことに尽きる。笑いあい、話に耳を傾け、被災者と共にいた時間が相互信頼を育み、ニーズの把握を可能にした。被災者達は HF メンバーを個人名で呼んだ。ここに被災者との良好で濃い人間関係が窺える。HF が、被災者への敬意を失わなかったことも非常に大きい。この姿勢を支えたのはおそらく彼らの信仰であったろう。一言でいえば HF は「自分がしてあげたいことではなく、相手がして欲しいことをした」のだ。支援者に必要なのはこの姿勢ではないだろうか。

避難所は、全く接点がなかった在日ムスリムと被災者の異文化交流の場でもあった。それによって被災者はイスラームに対するイメージを「意外に柔軟」と変化させると同時に、在日ムスリムを初めて「親切な隣人」として意識し、一方の HF は信仰を深め、これまでにない深度で人と向き合った。ここには信仰や人種、宗派の違いを超えた共生の可能性がある。たとえそれが災害ユートピア／ハネムーン期の出来事であったとしても。

また本稿は、HF の支援が「クリーン」だった理由の一つとして、施される者が神による報奨を得るための「媒体」に過ぎないという、セム系一神教の慈善の構造を指摘した。その構造はより重要なことに、おそらく受援者の屈辱感や罪悪感を軽減する機能を有している。ただし支援の有効性を担保したのはこの慈善の構造ではなく、支援者が受援者の方を向いているか否かであった点は強調しておきたい。支援は支援者の論理だけでは語れない。HF の事例は、受援者の視点こそが重要であること、支援者の不可視化された資源をめぐる欲望はしばしば支援自体を歪めてしまうこと、被災者への共感とニーズの把握こそがより良い支援に繋がることを示している。

註

(1) 在日アフマディーヤの詳細や生存戦略については別稿［嶺崎　2013］を参照。教団全般の先行研究は［Valentine　2008；Gualtieri　2004；佐々木　2010］等。

(2) 調査にご協力下さった被災者とボランティアの皆様に心から感謝する。特に HF をご紹介下さった庄司慈明氏と、HF のアニースさんとアヤーズさんには深謝。

大規模避難所で長期短期含め無数の団体・ボランティアが訪れ、様々な利害が錯綜した湊小避難所の全体像を描き出すのは不可能な上に本稿の目的ではない。避難所経験は立場や時期、個人により多様で重層的であることに注意されたい。

(3) 著作は阪神淡路大震災の被災・診療経験の貴重な記録。［中井　2011］も参照。
(4) 本節は聞き取り調査と活動報告書［ナジーブ・ウラ　2011］に基づく。
(5) 例えば 9 月 5 日開催、約 500 人が参加したバザーの提供物品は以下。味噌（500g）450、本だし 450、お酢・ソース・しょうゆ（500ml）各 450、サラダ油（1l）500、砂糖・塩・洗剤（1kg）各 450、マヨネーズ（500g）450、食器洗剤（500-600ml）450、石鹸・シャンプー各 450、シーチキン・サバ味噌缶・フルーツ缶各 600、お米（5kg）450、コーヒー・緑茶（100g）各 450、T シャツ（女性・男性用各 300）フライパン 300、洗濯ネット、柔軟剤、生理用品、化粧品等。
(6) http://shukuran.jimdo.com/チームシュクラン/　最終アクセス Jan. 28, 2013.
(7) 教団と HF の詳細は HP を参照。http://www.alislam.org/, http://humanityfirst.org/. 最終アクセス Feb. 27, 2013.
(8) 日本 HF 報告会資料［2011］と http://humanityfirst.org/最終アクセス Feb. 27, 2013.
(9) 建築基準法第 39 条に基づき、住宅等の新築や建替え等が出来ない地域。
(10) イスラームの慈善にかかる先行研究は例えば［Singer　2008；五十嵐　2011］。
(11) 筆者を居候させた 20 代エジプト人女性は謝礼に関し「あなたからのお礼や報奨は期待していないんです。アッラーが下さいます。私達はアッラーからの報奨こそが欲しいんです」と述べた。また 2000 年に筆者がカイロの市場で痴漢に遭遇した際、露天商が痴漢の腕を摑みあげ咎めた。犯行を否認した痴漢と露天商は激しい口論をしたが、痴漢が「神かけてやってない」と言うなり、露天商は手を放した。その理由を露天商は「彼は『神かけて』と言った。そうなればもうそれは人間同士の問題ではなく彼とアッラーの間の問題。彼が本当にしていたら、彼の事はアッラーが最後の審判の時に正しく裁いて下さる」と説明した。
(12) なお［稲場　2011：47-48］はこの点に本文中で触れている。
(13) 訳は日本ムスリム協会によった。
(14) 先輩に受けた恩を後輩に返す等、二者関係に限定されない例外も含む。この関係をある被災者は秀逸にも「恩送り」と表現した。基本的に神は介在しない。

参考文献

Frenkel, Miriyam and Yaacov Lev (eds.), 2009 *Charity and Giving in Monotheistic Religions*. Walter de Gruyter.

Gualtieri, Antonio, 2004 *The Ahmadis: community, gender, and politics in a Muslim society.* McGill-Queen's University Press.

Singer, Amy, 2008 *Charity in Islamic Societies*, Cambridge University Press.

Smith, Wilfred Cantwell, 1960 “Aḥmadiyya”, In *Encyclopedia of Islam*, C. Bosworth (eds.), 1: CD-ROM Edition.

Valentine, Simon Ross, 2008 *Islam and the Ahmadiyya Jama'at*. Columbia University Press.

安克昌 2011『心の傷を癒すということ　増補改訂版』作品社。

五十嵐大介 2011「あるマムルーク軍人の生涯と寄進：キジュマースの事例に見るワ

クフの多面的機能」『史學雑誌』120(3), 331-357。
「石巻かほく」編集局（編）2012『津波からの生還：東日本大震災・石巻地方 100 人の証言』三陸河北新報社
石巻市役所「石巻市被害状況（人的被害）」最終アクセス Jan.30, 2013. http://www.city.ishinomaki.lg.jp/hishokoho/sinsai/hisajyokyo.jsp
稲場圭信 2011『利他主義と宗教』弘文堂。
警察庁緊急災害警備本部 2013「平成 23 年(2011 年)東北地方太平洋沖地震の被害状況と警察措置」http://www.npa.go.jp/archive/keibi/biki/higaijokyo.pdf Jan.30, 2013.
佐々木拓雄 2010「中道派イスラームの政治：インドネシア・ユドヨノ政権とアフマディヤ問題」『久留米大学法学』(64)：17-53。
佐藤寛（編）2005『援助とエンパワーメント』アジア経済研究所。
庄司慈明（未刊）『被災地に生きて』。
創風社編集部（編）2011『震災の石巻――そこから：市民達の記録』創風社。
ソルニット，レベッカ 2010『災害ユートピア』高月園子訳、亜紀書房。
著者名なし 2011『大津波襲来　石巻地方の記録』三陸河北新報社。
頓所直人 2012『笑う、避難所：石巻・明友館　136 人の記録』集英社新書。
中井久夫 2011『災害がほんとうに襲ったとき』みすず書房。
中原一歩 2011『奇跡の災害ボランティア「石巻モデル」』朝日新書。
ナジーブ・ウラ，アヤーズ 2011『HF 活動報告書 3 月-12 月』
西水美恵子 2009『国をつくるという仕事』英治出版。
子島進 2002『イスラームと開発：カラーコラムにおけるイスマーイール派の変容』ナカニシヤ出版。
子島進 2013「東北被災地における異文化接触：ムスリムのボランティア活動と日本人被災者の受け止め方」アジア文化研究所 第 7 回年次集会（レジュメ）
ハーマン，ジュディス 1999『心的外傷と回復』中井久夫訳、みすず書房。
藤川佳三『石巻市立湊小学校避難所』（映画）
フリードマン，ジョン 1995『市民・政府・NGO：「力の剥奪」からエンパワーメントへ』定松栄一・西田良子・林俊行訳、新評論。
嶺崎寛子 2013「ディアスポラの信仰者：在日アフマディーヤ・ムスリムにみるグローバル状況下のアイデンティティ」『文化人類学』78-1.（掲載予定）
みやぎ民話の学校実行委員会 2012『2011.3.11　大地震　大津波を語り継ぐために：声なきものの声を聴き　形なき者の形を刻む』みやぎ民話の会。
モーザ，キャロライン 1995『ジェンダー・開発・NGO：私達自身のエンパワーメント』久保田賢一・久保田真弓訳、新評論。
ラヴェル，キャサリン 2001『マネジメント・開発・NGO』久木田由貴子訳、新評論。